

博多織の“音”で創作舞楽

博多織の織機から出てくる音を素材に編まれた音楽とコンテンポラリーダンスを組み合わせた創作舞楽「織・曼茶羅～博多織の機音による」が15日、福岡市・天神のアクロス福岡円形ホールで披露される。作品を手掛けるのは九州大学ソーシャルアートラボ(SAL)のプロジェクトチーム。これまで九州の焼酎、福岡県の八女茶と地場産品を起点にした創作を積み重ねてきた。博多織からはどんな音を織りあげていくのか。



宮嶋美紀さん(右)の機織りの音を手前で鈴木陽介さんが確認



「機の音が素材といっても機をそばで録音するわけではなく、体に聴診器をあてるように、ヒエゾマイクを機に付着させて採取しました」。福岡市南区のSAL事務局で技術スタッフの鈴木陽介さん(26)がパソコン画面で異なる8種類の波形を見せてくれた。

ヒエゾマイクはいわば振動センサーで、織る際に足で踏む「踏み木」などの力所に設置。耳では直接聞かえない心臓音を聴診器で聴くように、センサーを機に密着させているような微細な音を拾った。パ

織機の微細な音を採取

ソコン画面は、その波形だった。

通常の録音だとカシヤカシヤと金属的な鋭さが耳に付くが、そうして採取された音を聴くとまるやかさが出て異なる響きである。

「トーン、ト、トントン」という機の音は博多織特有で、音は織師の呼吸のリズムに呼応していることも分かった。プロジェクトを主導する藤枝守教授(作曲家)は「出来上がった織物に私たちは目を奪われる。でも、織る人の呼吸、反復する動きが織りの

織機の6カ所から取った振動の波形

ガムランなどと醸す異空間

公演当日は会場に5台のスピーカーを分散して設置。機の音がスピーカーから流れる中、銅鑼やガムラン、琴や笙の音が入り、巫女の役を担った2人のダンサーが舞う。藤枝教授は「機の音それ自体より、実は、その中に人々の記憶や感情などが凝縮されていることを考えると奥深く、(円形ホールという)曼茶羅的な空間で響かせてみたい」と話している。

(神屋由紀子)

「最初は何をするのか想像できなかつたが、おもしろそうと引き受けた」と福岡市の博多織職人、宮嶋美紀さん(40)が協力した。普段は意識しないような微細な音の採取に「振動が織りに密接に関係していたのは意外だった」と発見があったようだ。

九大チーム、15日に初演

◇公演は午後5時、7時半の2回。入場料は前売り2000円、当日2500円。SAL=092(553)4552

背後にある」と解説する。

「最初は何をするのか想像できなかつたが、おもしろそうと引き受けた」と

エンタメ
Entertainment